

おわりに

芸能関係の方を追っかけた経験はなく、アイドルとの握手会に出向いたこともない。しかし何人かを追っかけていて、その対象の一人に中村桂子さんがいる。もちろん、著作や発言をできるだけ追っかけているにすぎない。

彼女が6年生の国語教科書に寄せた「生き物はつながりの中に」という文章がすばらしい。時に応じて他者にも一読を薦めている。「たまたま子供の教科書を見て」というお母さん方の賞賛の声も、ネット上に多く見られた。子供たちに続く40億年の生命の歴史と今の地球上の生き物同士のつながりを述べ、「いま生きていることが素敵だと思いませんか？」と6年生に呼びかけている。同じ会社の5年生の国語教科書には、鷺谷いずみさんの「サクラソウとトラマルハナバチ」という、これまた一読を薦めたい教材もある。「サクラソウには花粉を運ぶトラマルハナバチが必要で、そのハチが生きるにはサクラソウ以外の花の蜜が欠かせず、ハチは野ネズミの古巣を利用して巣を作る。野ネズミが生きるには・・・」という内容である。「わらしべ長者」の話とも似た面がある。

コロナ禍ということで、「全ての国々はつながっている。地球上の全ての生き物はつながりあっている」と改めて突き付けられた気がした。近年の、未知のあるいは地域限定的だった感染症の世界的流行の原因は、気候変動も含めた環境破壊だという話があり、科学的な証拠も少なくないとも聞く。

カタクリやエンゴサクの実りには送粉者が必要で、種子はアリに運ばれ、花が咲くまでには芽生えから5年～10年もかかるということを知る人は多いかもしれない。しかし、コーヒーの木が収穫できるまで育つのに何年かかり、どれくらいの水が必要かを知る人は多くはないだろう。手作業で実を摘み、選別し、乾燥させる。それを担う人々の生活や賃金、理不尽な方法で奪われた土地、輸送に必要な化石燃料の量などに思いを寄せる場合も少ないかもしれない。少し生き物のことを学ぶと、世界中の生物や経済・社会がつながりあっていることを忘れ去ることはできなくなる。

安いバナナを手にするとき（昔はバナナが高価で、家族に重病人が出ないと近くで見ることができなかった）、「輸入」と表示されたエビを食べる際、ときに軽い胸の痛みと小さな罪悪感を覚えてしまう。いつもではないし、できれば思い起こしたくない事として心理的に目を背けてはいるけれど・・・。「衣食足って礼節を知る」ことは本当だろう。経済活動も大切である。しかし、ときおりには、身の回りの生き物たちの暮らしとつながりに目を向け、心を寄せてほしいものと願っている。

2021年3月

魚沼市自然環境保全調査委員会

副委員長 富永 弘

魚沼市自然環境保全事業

令和元年度（2019年度）令和2年度（2020年度）

魚沼市自然環境保全調査報告書

～自然を活かしたまちづくりのための市民参加型調査～

2021年3月31日 発行

編 集 魚沼市市民福祉部生活環境課 TEL 025-792-9766 FAX 025-793-1016

監 修 新潟県立植物園 園長 倉重祐二

魚沼市自然環境保全調査委員会委員 富永 弘

魚沼市自然環境保全調査委員会委員 藤塚 治義

発 行 魚沼市（魚沼市小出島910番地 〒946-8601）

調 査 特定非営利活動法人 魚沼自然大学

現地調査

○調査員（調査リーダー）

（植物） 富永 弘 和田 齊 田中ミチ子 井上美知子 高橋新一 大桃好子

星 澄子 星 全倫 武藤光佳 小熊敏一 貝瀬正俊

（鳥類） 桑原和寿 角屋禮士 佐藤武 桑原哲哉 深澤和基

（水生生物） 横山正樹 渡辺和生 井口史男 坂大 守 松浦文子

（昆虫） 坂大 守 横山正樹 渡辺和生 井口史男 松浦文子

○市民ボランティアのみなさん

協 力 小出野鳥の会、魚沼昆虫同好会、新潟県立植物園、魚沼市理科教育センター

印 刷 株式会社 アートプリント角越
